

理想社会の体系のなかにとじこめられたりするもの**の**だろうか。

とすれば、いったいどのようにして、このつきまといはびこる奇妙な生理的自然とのあいだに、人間は、ユートピア的な防壁を設けることができるのたろうか。

6 A である。ほとんど強迫観念のようなもの、といつてよいかもしれない。

人間はかつて森を出て自然を對象化して以来、人間自身をふくむ自然を徐々に改変する

イ知性によって自己主張ばかりしているうちに、自分の存在の場所を見失い、政治や経済

においても根源的な敗北を余儀なくされているということ。都市や世界ばかり意識しているうちに、自然環境を破壊してしまったため、根源的に帰る場所を見失った虚無的な生を強いられているということ。

ハ知性で未来の可能性を追求するうちに、根源的などころで生きる意味や根拠を見失うなど空虚な存在となってしまったということ。

二 都市生活のなかでの居場所は明確に自覚していても、広い世界のなかで自分が存在する場所を見失い根源的にうつろな生き方を強いられているということ。

ホ 知性の作り出した人工的な世界に依存し、魂の所在を忘れて邁進するうちに自己主張を支える深い根源的な知性を見失ったということ。

[illegible]

第三問

ことよって、都市を、文明を、かたちづくってきた。そんな過程がいわゆる〈進歩〉であつたとすれば、その目標、その最終段階がつまりユートピアである。

7 プラトンの『国家』以来、さまざまな時代にさまざまな作品がこの社会形態をものたり、ユートピアは文学の一ジャンルとして生きつづけることになった。

8 典型的なユートピストたちの思いえがいた理想社会は、△がおどろくほどに似たりよつたりで、かわりばえがしなかった。千年、二千年をへても、プラトンの『国家』からほとんど〈進歩〉していないように見えるのだ。なるほど各時代にいくらかの独創や逸脱もないことはなかった。けれども、基本はいつもおなじだったのだ。四方に防壁をめぐらした自己完結的な都市空間。人工の美や清潔さや便利さや合理性や技術改良やキカ学や統制への愛。人間とその生活は、自動機械のように画一化されている。自由などはない。いや、自由がないということを感じなくなるほどまでに、ユートピアの住民は幸せである。

9 ユートピストたちはいつも自然を矯正しようとしてきた。彼らは自然の体現する偶然や無秩序やアナキーを、もっぱら排除しようとしてきた。こうした統制と画一化への意志は、当然、人間とその社会につきまとう生理的自然にまでおよぶことになる。

10 いわゆる五感もまた、彼らのユートピア的再構築の対象となるだろう。

11 まず視覚。これならなんとかなる、とユートピストたちは考えるらしい。完璧にとどえられている理想都市の景観は、すみからすみまで、自然の乱脈さを極力おおいかくしたものである。

12 聴覚はむしろ武器になりうるだろう。たとえば音楽という秩序の友がすでにいるからだ。妙なる音楽は人々の心を調和と無感覚にみちびいてくれるだろう。

13 味覚や触覚となると、選別の問題をふくむかもしれない。不快なものや危険なものには近づけないようなシステムをつくる。

14 さて、のこるは嗅覚である。興味ぶかいことに、ユートピストたちは古来、匂いについては言葉すくなどであつたように見える。

15 もちろん彼らにしても、樹々や花々の馥郁たる香がきらいなわけではない。匂いの音楽といったものを発明しようとする人もいることはいた。けれども、人間とその社会の発する雑多な匂いについては、なかなか手がおよばなかった。ともすれば、腐敗や排泄の問題はユートピストたちにとって、ほとんどBであつたかのように思われもする。

16 彼らは匂いのユートピアを構想しおおせることはなかった。おそらく多くのユートピアはむしろ、無臭の世界として構想されていたのである。

17 いや、いまだつてそうではないのか。着々とユートピアに近づこうとしている現代の管理社会もまた、無臭の理想にとらわれているかに思われる。

問一 傍線部 a～d のカタカナを漢字に改めよ。

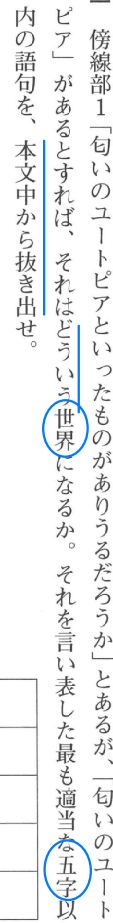
a

b

c

d

に入れるのに最も適当な語を、次の各群からそれぞれ一つずつ選び、



傍線部1「匂いのユートピアといったものがありうるだろうか」とあるが、匂いのユート

「ピア」があるとするば、それはどういう世界になるか。それを言い表した最も適当な五字以
内の語句を、本文中から抜き出せ。

傍線部2「ユートピストたちはいつも自然を矯正しようとしてきた」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ
ユートピアは、近代の人間が自然と人工の調和を求めた帰結だから。

口 従来構想されてきたユートピアは、どれも隔々まで同じものだったから

自然の乱脈さから目を背けようとするのでしか、ユートピアは成立しないから

ニ ユートピアは文明の究極にあり、文明化とは自然を統御していくことだから。

傍線部3「人間とその社会の発する雑多な匂いについては、なかなか手がおよばなかった」とあるが、それは「匂い」がどういうものだからか。本文に即して五十文字以内で説明せよ。

とあるが、それは「匂い」がどういふものだからか。本文に即して五十字以内で説明せよ。

[illegible]

筆者の考えに合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 文明の進歩とともに、ユートピアの概念も進歩と変化をつづけてきた。

口 五感を制御しようとする志向が、自然をも征服しようとする人間の意志を生んだ。

人間のあらゆる欲望を実現する世界こそが、理想的なユートピアだと考えられる。

ニ ユートピアは人間の自然的感覚を奪い去ろうとする点で、管理社会と通じている。

ホ
匂いの統御された快適な世界でこそ、人間は人間であることを実感しうる。